

戦時中 10万人超犠牲のバシー海峡

「船の墓場」日台結ぶ

生還者建立の寺 台湾人が管理

太平洋戦争中に台湾南方のバシー海峡で亡くなった日本兵を弔ってきた台湾の人々に心を打たれ、台湾在住の日本人の若者たちが慰霊祭を開催した。台湾最南端、屏東県恒春の岬に立つ「潮音寺」を11月下旬、約130人の遺族や台湾人と訪れ、10万人以上ともいわれる犠牲者を供養した。慰霊祭実行委員長の渡辺崇之さん(44)は「潮音寺を守ってくれた台湾の皆さんに感謝し、一緒に寺を守り、悲劇を伝えていきたい」と語る。

(恒春・中川博之)



バシー海峡を望む岬で戦没者を弔う遺族たち



「父ちゃん、父ちゃん、やっと会いに来たよ。母ちゃんも連れてきたよ」。潮音寺での慰霊祭の後、近くの砂浜に立った新潟市の佐藤秀子さん(77)は両親の遺影を持ち、海に向かって語り掛けた。5歳だった1944年秋、父親が乗った船はバシー海峡で沈められた。70年余りが過ぎて実現した「再会」。「皆さんに導かれ、ようやくこの地に立つことができました」と

日本の若者、感謝込め慰霊祭

声話を聞かせた。長女の足立明美さん(55)は打ち寄せる波に足を入れ、一祖父を奪った海は冷たく、暗く、つらいものと思っていました。でも今日、海は温かかった。いろいろな人の優しさが込められていました。

感謝する母娘の姿に、台湾留學中の実行委員、権田猛登さん(26)は「1年に1度は遺族が集まる場所をつくる責任を感じた」と、今度も慰霊祭を続ける決意を口にした。

潮音寺を建てたのは、44年8月に撃沈された輸送船から奇跡的に生還した静岡市の中嶋秀次さん(201)に3年に92歳で死去。いかに乗って12日間漂流し、緒を棄つていた仲間が創りや過ぎていく中、1人だけ救出されたという。台湾南部の高雄市で土産物店を営む呉昭平さん(77)、鍾佐栄さん(66)夫妻は77年、寺の建立場所を探し中嶋さんと出会った。代の実行委員会メンバーで、暗く、つらいものと過酷な体験を聞き、建立に協力、81年に完成させた。中嶋さんが亡くなった後も近所の住民に手伝ってもらい寺を管理してきた。

「1人だけ生き残った中嶋さんの自責の念を思う、台湾在住10年目の会社員、館重子さん(34)は、世話を焼く。来年も続けたい」と語る。

「バシー海峡、台湾とフィリピンのルン島の間にあり、台湾が日本統治下にあった太平洋戦争中は、南方戦線に武器や兵士を届け、石油などの資源を日本に運ぶ輸送船の重要な経路になっていた。戦況悪化とともに米軍の潜水艦の標的になり、多くの船が沈められた。輸送船の「墓場」と呼ばれ、犠牲者は10万人とも20万人ともいわれる。潮音寺を建てた中嶋秀次さんが乗っていた輸送船「玉津丸」には6千人近く乗っていたが、ほとんどは死亡したという。

「潮音寺を建てたのは、44年8月に撃沈された輸送船から奇跡的に生還した静岡市の中嶋秀次さん(201)に3年に92歳で死去。いかに乗って12日間漂流し、緒を棄つていた仲間が創りや過ぎていく中、1人だけ救出されたという。台湾南部の高雄市で土産物店を営む呉昭平さん(77)、鍾佐栄さん(66)夫妻は77年、寺の建立場所を探し中嶋さんと出会った。代の実行委員会メンバーで、暗く、つらいものと過酷な体験を聞き、建立に協力、81年に完成させた。中嶋さんが亡くなった後も近所の住民に手伝ってもらい寺を管理してきた。」

「バシー海峡、台湾とフィリピンのルン島の間にあり、台湾が日本統治下にあった太平洋戦争中は、南方戦線に武器や兵士を届け、石油などの資源を日本に運ぶ輸送船の重要な経路になっていた。戦況悪化とともに米軍の潜水艦の標的になり、多くの船が沈められた。輸送船の「墓場」と呼ばれ、犠牲者は10万人とも20万人ともいわれる。潮音寺を建てた中嶋秀次さんが乗っていた輸送船「玉津丸」には6千人近く乗っていたが、ほとんどは死亡したという。

2016年12月24日
西日本新聞